

県教委の示す「高校再編計画骨子（案）」に対する和教組の見解

2021年2月20日
和歌山県教職員組合
第11回執行委員会

和歌山県教育委員会（県教委）は、「和歌山県高等学校再編整備計画・実施プログラム骨子案」（のちに「論点整理」と改称）を作成し、県下各地域で「説明会」を開催しました。

私たち和歌山県教職員組合（和教組）は、2020年8月に県教委が「第6期きのくに教育審議会答申」を受け、現在29校ある全日制高校を20校程度に削減する「再編プログラム（案）」を策定する方針を示して以降、その撤回を求めてきました。県下5地域で開催された説明会においても「学級規模で機械的に高校を減らすな」「高校の存在は地域にとって重要」「少人数学級の実現で学校を維持せよ」など多くの声が寄せられました。

今回の骨子（案）では、「高校を可能な限り存続」「自宅から通学可能な所に（中略）高校を確保」「適正規模6学級についても目標ではあるが4～8学級に収まるような再編整備の進め方をめざす」など、当初に比べ、地域の声を一定反映した内容になっています。また、当初、2020年度中に再編プログラムを策定するとしていたものを期限にはこだわらず、慎重に検討していく姿勢も示していますが、県教委は決して再編整備方針を撤回したわけではなく、少子化を理由に小規模校では十分な教育を保障できないとして、高校再編（統廃合）の基本方針は維持したままです。

今回の骨子（案）では、県立高校の役割や使命を明確化し、7つのカテゴリー（地域中核高校、地域特性高校、特任高校、専門高校、総合専門高校、総合学科高校、定時制・通信制拠点高校）に分類していますが、これにより、「特色化」の名のもと、高校間での競い合いが強められ、高校の序列化・高校間格差がさらに深刻化する恐れがあります。

特に、「地域中核高校」とは別に、和歌山市内の2校（桐蔭高校と向陽高校）を「特任高校」と位置づけ、大学進学に特化した、いわゆる「エリート校」と位置づけ、特別扱いすることは、教育行政として県立高校の序列化・学校間格差を容認することであり、決して許されるものではありません。

県立高校の役割は、学科・規模にかかわらず、県内のすべての高校が「地域中核高校」となることです。小規模校には小規模校の良さがあり、中大規模でなければ十分な教育ができないのではなく、県下のどの地域でも、どのような規模の学校でも子どもたちの「学び」を保障するための条件整備（少人数学級や教職員定数改善等）こそが求められます。また、高校の存在は、子どもたちや保護者だけでなく地域の方々の生活や経済とも深い関りがあり、学校がなくなれば地域の過疎化が加速することも予想されます。

和教組として、今後の「県立高校のあり方」について、県教委がトップダウンで拙速に進めるのではなく、県内のそれぞれの学校や地域で、子どもたち・保護者・住民・自治体関係者・教育関係者等の意見や願いをしっかりと受け止め、全県一学制の見直しや高校間格差の解消を図り、県内のどの地域で生まれ育っても、誰もが希望する近くの高校で学べる体制を構築していくことを強く求めます。